

上海語の言葉遊びに見られる個人差と音節構造

松浦 年男

Abstract

In this paper, I show that the syllable structure of Shanghai Chinese has a constituent Final that includes a glide, a vowel and a consonant.

There is a language game in Shanghai Chinese, called ‘*mo-ma*’. In *Mo-ma*, speakers derives *mo-ma* from *ma* ‘mother’, *jo-jaj* from *jaj* ‘sheep’. Based on the observation that glides form a constituent with the initial consonant, Duanmu (1990) proposed that the internal structure of a syllable is made up of an Onset and a Rhyme; an Onset consists of a consonant and a glide, while a Rhyme consists of a vowel and a final consonant. He proposed the rule of *mo-ma*, which copies the syllable and replaces the first Rhyme with *o*.

According to the observations of the present author, however, *mo-ma* has idiolectal variations. For instance, some speakers derive *o-jaj* (instead of *jo-jaj*) from *jaj*. The analysis proposed by Duanmu (1990) cannot account for such variations. I propose that the internal structure of a syllable is made up of an Onset and a Final; the Onset consists of an initial consonant, the Final consists of a glide, a vowel and a final consonant, while the Rhyme consists of a vowel and a final consonant.

It follows under my analysis that the idiolectal variation of *mo-ma* is attributed to a difference in target for which the rule is applied. *jo-jaj* type speakers replace the Final in the first syllable with *o*, and *o-jaj* type speakers replace the Rhyme with *o*.

キーワード：上海語 音節構造 個人差 半母音 Final *mo-ma*

1 はじめに

1.1 上海語の音節の特徴

音節は韻律階層 (1) を構成する単位の一つである (Selkirk (1984) など)。

(1) 発話-音韻句-韻律語-フット-音節-モーラ

上海語に限らず漢語諸方言では、音節が形態素に対応することが多く、この2つを区別するのが難しい。しかし、語種によっては、その区別が比較的容易である。そういった形態素を使って、まずはじめに、形態素ではなく音節に対してかかる規則の例として、言葉遊びの規則を見る。

Sherard (1990:81) では音節に対してかかる言葉遊び規則の適用例として (2) を出している*¹。

- (2) noŋ k^hwa dy lɛ
あなた 早く 少し 来る
<早く来い>
noŋ-lɛ k^hwa-lɛ dy-lɛ lɛ-lɛ li-ŋo^{*2}

Sherard (1990:81) によるとこの言葉遊びでは、各音節毎に lɛ を挿入しているという。確かに (2) では音節毎に-lɛ を挿入しているとも言えるが、(2) で用いられている音節は同時に全て一単語、もしくは一形態素に対応している。そうすると、この言葉遊びは音節ではなく単語毎、または形態素毎に lɛ を挿入しているとも言えてしまう。

lɛ の挿入が音節毎なのか、単語毎、または形態素毎なのかを調べるために、ここでは多音節からなる単語で一形態素であることが明確なものとして、音訳された外来語を用いる。ただし、本論文におけるコンサルタントはこの言葉遊びをし

*¹ 用例の表記は全て簡略音声表記で行う。なおそのため Sherard、Duanmu からの引用についてもその表記を改変している。また、煩雑になるため [] は省略した。以下に、それぞれの対応を示す。

Sherard:本論文	Duanmu:本論文
nhuŋ:ŋoŋ	o:ŋ
kwa:k ^h wa	母音の前の i:j
lhae:lɛ	
gaw:ko	

*² Sherard (1990:81) によれば、最後の li-ŋo に特に意味はないとのことである。

たことがないため、はじめに筆者が単音節語を対象にした例を示し、コンサルタントが習熟した後に多音節語を交えてテストした。その結果が (3) である。

- (3) a. gə ta zi ny yeʔ
 ここ copula ニューヨーク
 <ここはニューヨークです。>
 gə-le ta-le zi-le ny-le ye-le*³
 *ny ye-le
- b. gə ta zi ɔ da li ja
 ここ copula オーストラリア
 <ここはオーストラリアです。>
 gə-le ta-le zi-le ɔ-le da-le li-le ja-le
 *ɔ da li ja-le
- c. gə ta zi i laŋ
 ここ copula イラン
 <ここはイランです。>
 gə-le ta-le zi-le i-le laŋ-le
 *i laŋ-le
- d. gə ta zi ku lŋ pi ja
 ここ copula コロンビア
 <ここはコロンビアです。>
 gə-le ta-le zi-le ku-le lŋ-le pi-le ja-le
 *ku lŋ pi ja-le

このように le は音節毎に挿入されているのであって、形態素 (単語) 毎に挿入されているのではない。ちなみに、モーラ毎にも挿入されているのではないことは、上の (2) の noŋ-le や (3c) における laŋ-le から明らかである。もし、モーラ毎に挿入されているならば、i laŋ は i-le la-le ŋ-le となるはずである。この le 挿入の言葉遊びの規則は、(4) のようになる。

(4) le 言葉遊び規則

入力の音節の右端に le を挿入せよ。

ここでは、上海語において形態素ではなく音節にのみ言及する規則が存在することを確かめた。

*³ 上海語では語末以外の声門閉鎖音が消失するため yeʔ-le ではなく ye-le となっている。

1.2 本論文の主張

上海語の音節内部において、分節音の配列には次のようなパターンが存在する。

(5)	C	V	CV	GV	CGV
	ŋ:	i:	ŋɔ:	wa:	tjɔ:
	<魚>	<塩>	<私>	<壊れる>	<跳ねる>
	VC	CVC	GVC* ⁴	CGVC	CC
	yŋ	zɔŋ	jaŋ	ljaŋ	sz:
	<雲>	<重い>	<痒い>	<測る>	<水>

このように上海語の音節は最大で CGVC という配列がありうる。

この4つの要素のまとまり方、つまりこれら4つがどのような構造を成しているかについて、Duanmu (1990) は CG/VC と分かれている主張している。しかし、本論では G は VC とともに一つの構成素を成している、すなわち C/GVC と分かれているのだと主張する。

2 mo-ma と音節構造 : Duanmu(1990)

この節では上海語の音節内部の構造がどのようになっているかについて Duanmu (1990) による議論を紹介する。

Duanmu (1990) では上海語の音節内部の構造を反映している例として mo-ma という言葉遊びに注目した。この言葉遊びは、次のように CV という入力に対して Cɔ-CV という出力を出す。

(6)	Duanmu (1990:39) より
	ma mɔ-ma <母>

この言葉遊びの入力に半母音を含む単語を用いると (7) のようになる。

*⁴ 匿名査読者の一人から「GVC というのは onset の C がないのに G があるという点で、変ではないか。なぜ初頭の j を C としないのか」という疑問が寄せられた。「onset の C がないのに G がある」という点について、例えば Duanmu (1990) は北京語において、GVC のみで音節がつくられる時、初頭の C には空要素が存在すると主張しており、ここでは上海語でも同様であると仮定して議論を進めている。

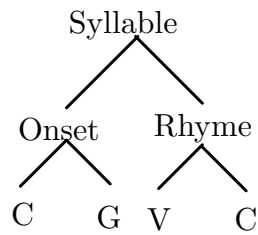
(7) Duanmu (1990:39) より

tjeʔ tʃə-tjeʔ <鉄>

jaŋ jə-jaŋ <羊>

このように、(C)GVC という入力に対して (C)Gə-(C)GVC という出力が得られたことから、Duanmu は上海語の音節構造を (8) のように主張し、mo-ma は (9) のような規則によって派生されると主張している。

(8) Duanmu の主張する音節構造



(9) a. 入力の音節を繰り返せ

b. 第1音節の Rhyme を ə に変えよ

以下に、(8)(9) による <鉄> の派生を示す。

(10) 入力 tjeʔ

(9a) tjeʔ-tjeʔ

(9b) tʃə-tjeʔ

出力 tʃə-tjeʔ

ちなみに、この現象を説明するためには、「CGVC のうち CGV をコピーし、その後 V のみ ə に変えよ」という規則を立てても、同じ結果が得られる。しかし、CGV をコピーするというのは、McCarthy and Prince (1995) の韻律形態論仮説 (Prosodic Morphology Hypothesis^{*5}) に反し不適當であるため排除される。なぜなら、韻律形態論仮説ではコピーの対象 (=テンプレート) は韻律階層内の要素に限定している。CGV というのはモーラであると考えることが可能かもしれないが、漢語諸方言でも一般的にそうであるように、他にモーラが関与的な現象がほとんどないため、この考え方は問題がある^{*6}。

^{*5} Prosodic Morphology Hypothesis: Templates are defined in terms of the authentic units of prosody: mora (μ), syllable(), foot(F), prosodic word (PrWd)(McCarthy and Prince 1995:318)

^{*6} 「CGV がモーラである」という考え、及びそれに対する問題点の指摘は匿名査読者によるところが大きい。

3 mo-ma に見られる個人差とその説明

3.1 mo-ma に見られる個人差

2 節では、mo-ma という言葉遊びに見られる規則性から、上海語の音節構造は CG/VC としたほうが良いという議論を紹介した。この節では mo-ma の言葉遊びに個人差が見られることを指摘し、この個人差を説明するためには、音節構造は C/GVC とした方が良いということを示す。

まず、2 節で見た mo-ma の例を繰り返す。

- (11) ma mɔ-ma <母>
tjeʔ tɕ-tieʔ <鉄>
jaŋ jo-jaŋ <羊>

ここでは、半母音は全て初頭子音とともに一つの構成素を成しているかのような振る舞いをしている。しかし、この mo-ma という言葉遊びには個人間で差が見られる。以下に示すのは筆者のコンサルタント(複数名)によるものである。ただし、1.1 節での言葉遊び同様、この言葉遊びも皆知らないということだったので、筆者が CV の音節パターンでの例を示し、コンサルタントが習熟した後、半母音を混ぜたデータを用いて調査を行った*7。

- (12) jaŋ <香り> sɔ jaŋ または ʃɔ jaŋ
 jaŋ <羊> ɔ jaŋ または jo jaŋ
 kwa <速く> kɔ kwa(kwɔ kwa とは区別できない)
 ʃyeʔ <雪> sɔ ʃyeʔ または ʃɔ ʃyeʔ
 ʃa <写す> sɔ ʃa または ʃɔ ʃa
 ljeʔ <力> lɔ ljeʔ または ljɔ ljeʔ

このデータは 4 名の上海語話者から取ったものである。コンサルタントごとの分布は次のようになっている。A 氏は常に CGɔ-CGVC、B 氏は常に Cɔ-CGVC となった*8。また、C 氏、D 氏は ljeʔ では Cɔ-CGVC になり、他の単語では

*7 ここで用いたデータは、コンサルタントがこの言葉遊びを元々知っていたかという点で、Duanmu のものと質が異なるかもしれないが、そうだとでもここで示したデータに対する説明を Duanmu が与えられないのは変わらない。

*8 以下、議論に関与しない煩雑さを避けるため、(C)GO-(C)GV(C) などの括弧表示を省略する。

CG_o-CGVC となった。

まとめると、mo-ma の作り方は話者により次のように異なっている。

(13) a. A 氏

CGVC CG_o CGVC

b. B 氏

CGVC C_o CGVC

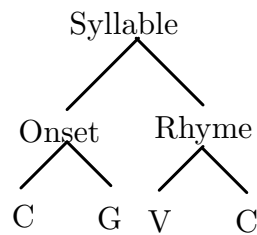
c. C 氏、D 氏

CGVC C_o CGVC または CG_o CGVC

3.2 個人差の説明

以下では (13) に見られる違いはどのようにすれば説明可能か考察する。まず、(8) の構造について考えてみる。

(8) Duanmu による音節構造

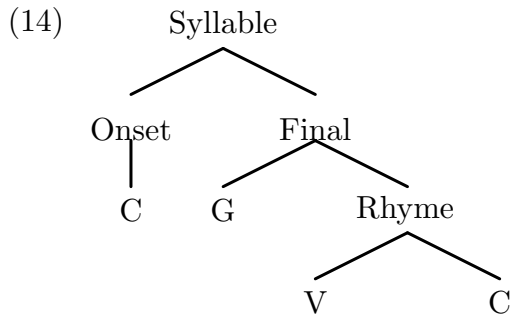


この構造では CG/VC となっており、GVC で一つの構成素をなすということ予測しない。したがって、(13b,c) のうち、C_o CGVC となっているデータが説明できない*⁹。そもそも、Duanmu の構造では GVC は一つの構成素を成していないため、_o に取り替える部分を指定できないのである。

つぎに、C/GVC となっている構造 (14) について考えてみる*¹⁰。

*⁹ 匿名査読者の一人から「CG/V という構造でも、「初頭の C」に refer すればよいという考え方があり得る。論理的に排除できない」との指摘があった。「初頭の C」に refer する規則というのは「入力の音節をコピーし、第 1 音節の初頭の C を除く要素を _o に変えよ」という規則だと思われる。確かにこの規則を用いても記述的には正しい。ただ、初頭の C を除く要素を規則で指定することがなぜ可能なのかについて、この規則では何も述べられない。そのため本論文ではこの規則による説明を採用しない。

*¹⁰ ここで出した音節構造自体は筆者の考案によるものではなく、特に漢語諸方言の分析ではよくみられるものである。詳しくは Duanmu (2000) を参照。



この構造に基づくならば、 \circ になる対象が (13a) では Rhyme であり、(13b) では Final であり、(13c) ではどちらか、ということになる。つまり、(13) において見られる個人差、また個人の中でのゆれは、以下の規則 (15) で、置換する要素として Final を選ぶか、Rhyme を選ぶかという違いに帰すことができる。

(15) mo-ma 言葉遊び規則

- a. 入力 of 音節を繰り返せ。
- b. 第 1 音節の {Final, Rhyme} を \circ に変えよ。

この構造と規則に基づいて、Duanmu のコンサルタント及び筆者のコンサルタント A 氏の派生を (16) に、筆者のコンサルタント B 氏の派生を (17) に、 $\langle \text{ja}\eta \rangle$ を例にとってそれぞれ示す。

(16) Final を \circ に変える時の派生

入力 $\text{ja}\eta$
 (15a) $\text{ja}\eta\text{-ja}\eta$
 (15b) $\text{j}\circ\text{-ja}\eta$
 出力 $\text{j}\circ\text{-ja}\eta$

(17) Rhyme を \circ に変える時の派生

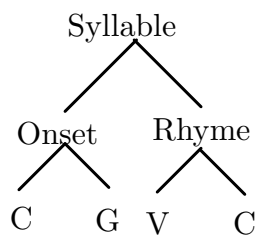
入力 $\text{ja}\eta$
 (15a) $\text{ja}\eta\text{-ja}\eta$
 (15b) $\text{j}\circ\text{-ja}\eta$
 出力 $\text{j}\circ\text{-ja}\eta$

もちろん他に、Duanmu のコンサルタントと A 氏は (8) の構造、B 氏は (14) の構造だという可能性も残る。しかしそう仮定すると、C、D 氏は 1 人の頭の中に 2 つの音節構造を持っているということになってしまう。このことから音節構造は (14) であり、本論文で見られた mo-ma のバリエーションは、置換する構成素の違いであると考えたい。

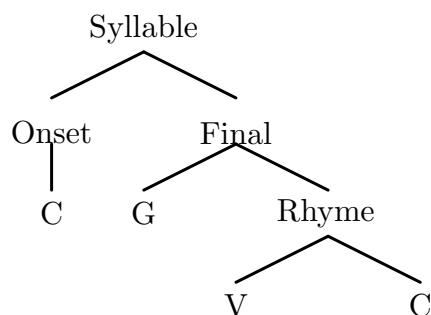
4 まとめと今後の課題

本論文では、上海語の音節について、Duanmu (1990) による (8) のような構造では mo-ma の言葉遊びの個人差が説明できないこと、そしてこの個人差を説明するためには別の構造 (14) を仮定する必要があることを示した。

(8) Duanmu の主張する音節構造



(14) 本論文の主張する音節構造



今後は、音節内部に見られる制限 (例えば分節音の共起関係など) も視野に入ると同時に、今回のような実験音韻論的手法も援用することで、音節の内部構造がより明らかになるだろう。また、実験の手法などの点でまだまだ不十分な点があり、今後より精密化した実験を行う必要があるだろう。

謝辞

まずはじめに、言語コンサルタントとしてご協力頂いた方々に深い感謝を示したい。

本論文は、筆者の修士論文「上海語分節音韻論」の一部を改訂したものである。久保智之先生、菅豊彦先生、稲田俊明先生、坂本勉先生には、修士論文執筆のみならず修士課程における研究にあたり御指導いただいた。そして九州大学言語学研究室の高井岩生、向井絵美、東村亮平、田中大輝、佐藤久美子、光富和佳子の各氏との議論は、修士論文、本論文を作成する上で助けとなった。そして、小野寺ゲアリー、張楚栄の両氏には英文要旨を見ていただいた。また、二名の匿名査

読者からも貴重なコメントを頂いた。これらの方々に記して感謝したい。無論、本論文中における一切の誤りは筆者の責任によるものである。

参考文献

- Blevins, Juliette (1995) "The syllable in phonological theory", in Goldsmith (ed), pp.206-244
- Duanmu, San (1990) *A formal study of syllable, tone, stress and domain in Chinese languages*, Ph.D dissertation Cambridge, Mass.: MIT. Distributed by *MIT working papers in linguistics*
- Duanmu, San (2000) *The phonology of Standard Chinese*, Oxford: Oxford University Press.
- Goldsmith, John A. ed. (1995) *The Handbook of Phonological Theory*, Oxford: Blackwell
- Lin, Yen-Hwei (2001) "Review article of San Duanmu's *The phonology of Standard Chinese*", *Phonology*18-3, pp.458-463
- McCarthy, John J. and Prince, Alan, S. (1995) "Prosodic Morphology" in Goldsmith ed. (1995), pp.318-366
- 松浦年男 (2001) 「上海語の音節構造と分節音の問題点」, 草稿、九州大学大学院
- Selkirk, Elisabeth O. (1984) *Phonology and syntax: The relation between sound and structure*, Mass.:MIT press
- Sherard, Michael (1972) *Shanghai Phonology*, Ph.D dissertation, Cornell University
- Sherard, Michael (1982) *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, Computational Analysis of Asian & African languages 15, ILCAA
- Sherard, Michael (1990) 「現代上海語のことば遊び」, 江口一久(編)『ことば遊びの民族誌』, pp.70-95、大修館書店

(まつうら としお、九州大学大学院人文科学府博士課程)